

カルヴァンにおける

「神の像」の〈残り〉の問題 (その三)

小島 一郎

目次

はじめに

一 墮罪と「神の像」の喪失

1 「神の像」は完全に失われたか

(1) 「神の像」は喪失した

(2) 「神の像」の〈残り〉が存在する

(3) 喪失と〈残り〉の関係

2 中世カトリック神学の場合

二 「神の像」の〈残り〉の解明

1 「神の像」における二つの賜物の区別

2 「神の像」の〈残り〉の現実

(1) 自然的賜物としての「たましい」の

能力の腐敗

(2) 神認識の可能性

A 〈理性〉の働き

B 〈宗教のたね〉

C 自然的啓示

(以上「紀要」一七号)

(3) 「市民的義」*iustitia civilis* の問題

(4) 〈意志〉の自由の問題

(5) 〈良心〉の働き

(以上「紀要」二〇号、以下本号)

3 「神の像」の〈残り〉とその回復

(1) 神の創造意図

A 創造の目的と創造の継続

B 〈選び〉と「神の像」

(2) キリストにおける新しい創造

結び——今後の課題

3 「神の像」の〈残り〉とその回復

カルヴァンに従えば、人間は他の一切の被造物と決定的に異って、神の恵み深い、しかも重大な決意において、「神の像」に創造された。この「神の像」に創造されたことの中に、人間の本質を見る。すなわち、人間は自分の存在と生命とをもって、創造者の栄光を讃美し、創造者との人格的な交わりに支えられて、人間同志の愛と信頼に生きることが許されていた。

ところが、人間はサタンの誘惑に敗北し、罪を犯し、神に反逆するものとなった。この墮罪における悲惨な人間の姿を、カルヴァンは「神の像の喪失」と呼んでいる。⁽¹⁾

カルヴァンはこの「神の像」の喪失を徹底的なものとしながら、「神の像」の〈残り〉が存在するという。⁽²⁾ この「神の像」の〈残り〉は、かろうじて人間存在の最少限の可能性をあらわしているが、人間が本来の人間として生きるためには、失われた「神の像」が回復されなければならないことは、前号までに明らかにされたところである。

そこで、この「神の像」の回復の問題を考察するのであるが、ここで、カルヴァンが「神の像」という言葉を二重の意味で用いていることに注意したい。

今まで見てきたように「神の像」とは、人間の中の何か実体的なものではなく、神との人格関係をあらわす言葉であり、いわゆる〈関係概念〉であるが、この神と人間との関係は、神の側から見られ、表現される場合と、人間の側から見られ、表現される場合とがある。

神の側から言うならば、神と人間との関係は、その創造の当初から少しも変わらないと言ってよいであろう。

「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り……」(創世記1・26)という表現は、神がご自分の内部で

「わたしとあなた」という人格関係をもっておられ(内在的三位一体論)、このあり方を神は人間との間にも成り立たせようとされたと思われる。

神御自身の内部における三位格間の愛の関係を、人間を創造することによって、御自分と人間との間にもつくり出されたのである。

神の人間に対する関係は、純粹に愛と恵みとを注がれる一方的な継続的なかわりであり、人間が罪を犯し、神から離反してもなおその関係を継続しておられると云ってよい。

他方、しかしながら、人間の側から言うならば「神の像」に創造された人間は、神の愛を喜び、その恵みに感謝をもって応答し、神の栄光を輝かす存在として期待されていると云うことができる。

ところが、この神との祝福された愛の関係を、墮罪によって破壊してしまったので、この人格関係としての「神の像」は完全に失われてしまったと言われるのである。

神の恩恵としての「神の像」は、墮罪によっても失われないが、この恩恵に対する人間の応答としての「神の像」は、完全に喪失したのである。

この「神の像」の二重性、神の側からと人間の側からの両面性があることが混同されると、論義が無意味に複雑になったり、混乱したりすることになる。

カール・バルトは、「神の像」を神の側からのみとらえているので、人間に対する神の恩恵という意味での「神の像」は、人間の墮罪によって失われることはないと考えている。⁽³⁾これは一面において正しいのであるが、人間の責任性・応答性の面から言えば、「神の像」は罪によって内容的に無にされているので、キリストによる回復を待つ外ないのである。

そこで先ず、神の側からの神と人間の関係性としての「神の像」の問題を考えてみよう。

(1) 神の創造意図

A 創造の目的と創造の継続

カルヴァンは創世記の講解の中で次のように言っている。

「人間はもしも人間そのものにだけ目が注がれるならば、神の配慮にあずかるのに全く適わしくないものである。しかし人間は、そのうちに刻みこまれた神の像をおびている故に、神はあえて人間との深いかわりをもとうとされるのである。このように、人間は神の愛顧を受けるべき何ものをも自らのうちにもってはいないけれど、神は人間のうちに御自身の賜（神の像）をごらんになり、それによって人間を愛し、人間に心を用いようとされる。しかしながら、この教説は、次のことが注意深く観察されるべきである。それは、人は誰も神御自身を傷つけることなしに、その兄弟を傷つけることはできないということである。もしもこの教えが我々の心に深く受けとめられるなら、我々は他人を傷つけることなど決してしたくないと思うべきである。もしも誰かが、この神の像はすでに抹消されてしまつたではないかと反論したとしても、解決は容易である。第一に、そのいく分かの残りが存在すること……。第二に、人間がどのように墮落したとしても、天にいます創造者御自身が、依然として当初からの創造の目的をもち続けておられること、そこでそれ故に、この神の模範に従って、我々も神がどのような目的をもって人間を創造されたか、他のすべての生き物にまさって、神が人間にいかなるすぐれた賜物をお与えになったかを深く思うべきである。」と。⁽⁴⁾

人間がどのように墮落したとしても、天にいます創造者が依然として当初からの創造の目的をもち続けておられるという点が大切である。

それでは、神の創造の目的は何であろうか。カルヴァンは「神がかつてひとたび、これらすべてのものを創造しようとし心なきめ、そして今、それらを保持しようとし心を動かしておられるのは、どういう原因によるかを問いたずねるならば、その原因としては、ただ、神のいつくしみしかなことを、われわれは確認するであろう。ところで、こ

れしかほかに原因がないとすれば、われわれを神の愛にいざなって余りあるものがあると言えよう。なぜなら、預言者がさとしてるように、神の憐れみにあふれていないような被造物は何ひとつないからである(詩篇一四五・九)⁽⁵⁾。とのべ、創造の目的は、ただ神のいつくしみしかないと言う。神の愛によって創造されたことの中に、「神の像」の深い意味がある。

この創造における神の愛は、具体的には、どのようにあらわれているのだろうか。カルヴァンは次のように言う。

「神がその御力によってわれわれを支えて下さる限り、われわれは生き続ける。神が生命を支える御霊の働きをとどめるなら、ただちにわれわれは死ぬ。……この世界は毎日に新しくされる。それは神が御霊を送っておられるからである。生あるものの繁栄においてわれわれは、確かに新しい世界の継続的な創造を見る。……この世界が毎日に滅びつつ、毎日に新しくされていくのを見ると、生命を支える神の力が鏡を見るように映し出されているのである。生きていく者の中にあつて死ぬ者の姿は、いわばわれわれの虚無性の例証である。別の者たちが現われて成長するのを見ると、われわれはこの世界の更新を見るのである。この世界が毎日に死に、毎日にいたる所で新たにされているのは、それがただ神からの秘儀によるのだということだけは明らか結論である。」⁽⁶⁾

ここでカルヴァンは「継続的創造」*creatio continua* という考えを「神の像」の理解と結びつけていることに注意したい。

さらにカルヴァンは、使徒行伝一七章二八節の講解で次のようにのべている。

「われわれはこの箇所から、神は一旦創造された世界からその御手のわざを引いてしまわれることはないということとを学ぶ。神はむしろ御力をもって支え、創造者である神は支配者でもあられることを示される。われわれは神をいかなる瞬間といえども忘れることなく、絶えず継続的にいのちをお支え下さる方であることを思うべきである。」⁽⁷⁾

神の人間に対するかかわり方が、従って「神の像」としての人格関係が、神の継続的な恵みの表現と考えることが

できることを見てきたが、この恵みはまた、神の人間への明確な意志と結びついていることも見逃がすことはできない。

カルヴァンは「信仰の知解に関しては、単に神が存在したもうことを知るだけが問題になるのではなく、むしろ——これこそ主要な問題点であるが——神がわれわれに対していかなる意志をもちたもうかを、われわれが知解することこそが必要なのである。なぜなら、神がそれ自体として何であるかを知るとは、われわれにとつて余り意義のあることではなく、神がわれわれに対していかなるものであるかとしたもうかが知られなければならないからである。そういうわけで、われわれはいまや、信仰とはわれわれに対する神の意志を、かれの御言葉から受けて知ることだと把握した。⁽⁸⁾……われわれは、自らのために神のうちに救いがおかれているということを学んだのちに、はじめて神を求めるように心ひかれるからである。神が口ずから、この救いは御自身の心をください、熱心に遂行するところであると明言したもうとき、このことはわれわれに確認されるのである。したがって、神がわれわれに対して恵み深い父でありたもうことを証しするために、恵みの約束を待つことがわれわれに必要である。われわれはこれ以外の道では、かれに近づくことができず、人間の心はただここにしか憩うことができないからである。……信仰とは、神のわれわれに対するいつくしみの意志についての、堅固で確実な認識である。そして、これはキリストにおける価なしの約束の真理に基礎を置き、聖霊によって、われわれの心情に証印されるものである⁽⁹⁾」という。

また、「神のもろもろの力について言及がされ、それによって、『神が神自身として何であるか』ではなく、『われわれに対して何であるか』がわれわれに向けてのべられている。そのため、神についてのこのような認識は、空虚で見かけ倒しの思弁よりも、むしろ、生き生きした感動のうちにある⁽¹⁰⁾」とのべることによつて、カルヴァンは神を単に客観的にとらえようとするのではなく、また単に主観的にとらえるのでもなく、いわば主客相関的に、神の恵みのみわざからその本性を知る道を示している。これは、神の私たち人間に対するいつくしみ深い意志について知ることと深

く結びついている。

神の意志は未来に実現することを含み、希望としてとらえる要素もある。このことは「神の像」を終末論的に考えなければならぬ方向を示唆しており、後に別項で検討する。

さてこの項をまとめるに当たり、トールランスの考え方は、冒頭のバルトの見解と共に重要な意味をもっていると思われるので紹介しておきたい。

T・F・トールランスは「カルヴァンの人間論」の中で「『神の像』とは神の創造意図である。人間が罪を犯し、全墮落の状態にあってもなお、神の創造の目的遂行の意図は変わらない。神が御自分に反逆する人間をさばかれるときも、人間の滅亡を決して望んでおられるのではなく、それと正反対の聖なる目的が働いている。この意味では、神の恵み深い御旨が捨て去られないで留まる限り、すべての人間は「神の像」の中にあると言ってよい。罪人を愛し救うことと、罪をさばき、罪を滅ぼすこととは矛盾しないからである⁽¹¹⁾」とのべている。

このトールランスの理解にも示されるように、神の恵みの創造目的とその継続的な現実を「神の像」と呼ぶならば、「神の像」は墮罪によっても喪失せず、従って改めて回復を求める必要もない。神は弱い罪深い私たちだからこそ、一層見捨てることなく、つねに愛と恵みをもって私たちに働きかけ、救いを実現させてくださるのである。

B 〈選び〉と「神の像」

「神の像」を「創造の恵み」と考えるなら、当然これは「救済の恵み」、「完成の恵み」と共に救いの歴史を貫く神の真実のあらわれということになる。ここに〈選び〉の信仰が姿をあらわし、〈選び〉と「神の像」の深い結びつきが考えられてくる。

カルヴァンは悔い改めと再生との関係にふれたのち「この『再生』はアダムの罪過によってみにくくされ、ほとんど抹殺されるに至った『神の形』をわれわれのうちに再形成することを目ざすものにはかならない⁽¹²⁾」といい、次いで

キリストの救いのみわざをのべたあとで「こういうわけで、われわれはこのような再生を通じて、キリストの恵みによって回復され、アダムにおいて失われていた神の義にいたるのである。このようなしなやかたで、主は永遠のいのちの嗣業に選り入れたもうたすべての者を、完全に回復するのをよしとしたもうのである」⁽¹³⁾と言う。

さらに「『神の形』とは、人間の本性の完全な卓越性のことで、墮落前のアダムのうちに輝いていたものである。ところが、これは、そののちはなはだしく破壊され、ほとんど消し去られて、破滅以後は、混乱し・切り刻まれ・汚れに染んだもののほか、何ひとつ残らなくなってしまった。これは今、部分的にはあるが、御霊によって生まれ変わった限りにおいての『選り選ばれたもの』のうちに認められるであろう。」⁽¹⁴⁾とのべている。

「永遠のいのちの嗣業に選り入れられた者」とか、「選り選ばれた者」と呼ばれているが、神が創造の目的を保持し続け、その最初からの意図を実現成就しようとされ、そしてそれが私たちに對する恵み深い神の御旨の継続的なあらわれとして見る事ができるならば、その時には、T・F・トールランスによれば、「神の像」は「予定」という言葉で解釈されなければならない⁽¹⁵⁾。もちろん、「選り選りは恩恵に先行する」(Ⅲ・22・2)というような機械的・形式的な予定ではなく、「嗣業」という言葉が示すように、一方的なキリストの恵みによって終りの日に決定的になる終末論的な予定のことである。

この意味では、カルヴァンのヨブ記の説教の中の、人間は「神の国の嗣業を待ち望み、御子の栄光に共にあずかる者とされるようにと、神の像に回復されるものである。」⁽¹⁶⁾は、神の創造意図の完成と結びつく「神の像」の終末論的理解が示されている⁽¹⁷⁾といつてよい。

さて、以上は神の側から「神の像」を見たのであるが、今度は人間の側からこれを考えてみよう。

(2) キリストにおける新しい創造

墮罪によって「神の像」を喪失し、神との交わりを失った人間は、自分の方から神を認識し、救いを実現すること

は不可能となっている。神との人格関係の回復は、ただイエス・キリストによらなければならない。

カルヴァンは「キリストにおいてわれわれを御自身に和解させたもうた父なる神は、そのようにまたキリストにおいて、われわれに『形』を（範例またひながたとして）証印し、われわれがこれと同じ形になるように欲したもうのである。⁽¹⁸⁾」とか、「われわれが己れの創始者の真の始源と創造のおきてとから墮落していることを説いたのち、われわれを恵みをもって父なる神に和解させたもうたキリストが、罪なき生の範例として置かれており、このキリストの御形をわれわれの生活において表わすべきである」とつけ加えるのである⁽¹⁹⁾とのべ、さらに「このひとことのほかに、あなたは何を求め得ようか。すなわち、われわれは、われわれの生活において、子となるためのきずなとして『キリストを表わす』という条件のもとに、主なる神によって子とされるのである⁽²⁰⁾」と言う。

これらのカルヴァンの言葉は、「神の像」の回復は、単に教理的理解の問題ではなく、信仰生活の中で、キリストとの交わりが生き生きと再開され、キリストの像が、信仰者の生き方の中に実を結ぶことだと言っているのである。さて「キリストを表わす」生き方に、われわれはどのようにして回復されるのであろうか。

キリスト教綱要第一篇一五章四節は「キリストにおいて神の形は回復する」という主題が取り上げられ、「神の像」（＝神の形）の更新ないし再創造の問題が論じられている。

「われわれの救いの回復の手はじめは、われわれがキリストによって達する更新のうちこそある。キリストはまた『第二のアダム』と呼ばれたもうが、その理由はかれがわれわれのために真実で・堅実な完全を取り戻したもうからである。……しかし、これはもう一つの主要点——再生の目標は、われわれがキリストによって『神の形』に変えられるにあるということ——を無効にはしない。……われわれは今や、キリストこそ神の最も完全な『形』であることを見る。このキリストと同じ形に回復されるならば、われわれは真の敬虔と、義と、純粹さと、知性とにおいて『神の形』をもつのである。⁽²¹⁾」

ここでもはつきり示されるように、カルヴァンは、キリストによってのみ「神の像」の回復が可能となること、つまりキリストこそ「神の像」回復の可能根拠であることを明らかにすると共に、キリストこそ「神の像」そのものであり、「神の像」を失っている人間にとっては、キリストは「神の像」回復の目標である。キリストのようになり、キリストのように生きることができるとき、「神の像」は回復してきているのである。

この、キリストによる、キリストに向っての「神の像」の回復の営みは、終末論的な信仰の戦いと言わなければならない。⁽²²⁾

カルヴァンは「この回復はただ一瞬、ないし一日、ないし一年で完成するものではない。むしろ、たゆみのない、いや、時として遅々たる歩みによって、神は御自身の選民の肉の腐敗を廃止して行きたもうのである。そして、かれらの汚れを繰り返して潔め続け、かれらを神の宮として御自身のために奉獻し、かれらのいっさいの感覚を真の純潔にまで刷新し、こうして、かれらが全生涯をあげて悔改めを修練するようにし、またこの戦いは死によってのほか決して終結しないことを知らせたもうのである。……ところで、「神はわれわれを神の形に回復したもう」とわれわれが言うとき、ここに絶えざる成長の機縁があることを、われわれは否定しない。けれども、人は神の似姿に近づけば近づくほど、そのうちに神の形がいよいよ輝き出る、とわたしは言う。⁽²³⁾」と言って、「神の像」の回復は人間一生の課題であることを示している。

さらに彼は、コリント人への第一の手紙一五章四九節の註解に当って、「今やわれわれはキリストの像を身におびはじめた。われわれは毎日にキリストの像へと、少しずつ変えられていく。これが靈的な新生である。しかし終りの時には、からだと魂の両方が完全に回復される。今始ったところのことが、やがて完成され、今希望しているものが、やがて現実として与えられるのである。⁽²⁴⁾」と説明している。

終りの日の「神の像」の完全な回復を目ざしての信仰生活は、別の言葉で言えば「聖化」であり、「栄化」である

う。義認の恵みに支えられ、この罪の赦しの宣言の中で、人はこの救いの恵みにこたえてキリストを仰いで生きることを始める。

カルヴァンはこのことを「われわれはしかし、覆いをとり去られた顔において、主の栄光を示され、主の御霊によつてのごとく、栄光より栄光へと、主と同じ形に変えられるのである。」とコリント人への第二の手紙三章一八節を引用し、更に「あなたがたの心の霊を新たにし、神にかたどって、真理による義と聖とのうちに創造された新しき人を着るべきである」(エペソ人への手紙四章二三節)、また「あなたがたは新しき人を着たのである。この新しき人はいよいよ新たにせられて、これを創造したもうた御方の認識とその御形とに達するのである」(コロサイ人への手紙三章一〇節)という聖句を示して、キリストの形に達するように新しい人を着るといふ表現で、新しい生き方を示している。⁽²⁵⁾

最後に、この「神の像」回復の信仰生活は「悔改め」の生活となることを明かにしておきたい。

カルヴァンは、「一言で悔改めを説明するならば、これは『再生』である。⁽²⁶⁾」という。彼はキリスト教綱要第三篇第三章「われわれは信仰によつて新しく生まれる。ここには悔改めについて論じられる」という長い標題のもとに、悔改めは信仰から生じること、悔改めは「己を死なせることと新しく生きること」の二つの部分から成っていること、悔改めは御霊によつて与えられる賜物であることなどを論じて興味深い。

ここでは、悔改めとは、キリストと共に古い自分が十字架につけられて死に、復活のキリストと共に新しい自分によみがえることであり、それ故に悔改めは「再生」だといわれるのである。そして「悔改め」は再生に当って一回すればよいのではなく、信仰生活全体が悔改めであるといつてよい。

この悔改めを通して、絶えず新しく生まれ変わりを経験することによって、真の「神の像」であるキリストの姿が信仰者の品性と生き方の中にあらわれてくる。このようにして「神の像」の回復が実現する。

結 び——今後の課題——

カルヴァンにおける「神の像」の問題は、人間の創造、世界の創造という、創造論の問題、墮罪をめぐる人間本性の理解、罪の赦しや「神の像」の回復にまつわる和解論を中心にした問題、予定論や終末論、教会論やキリスト教倫理の問題など、幅の広さと奥行き深さをもった主題であり、カルヴァンも、それ以降の教会や神学者たちも、充分問題を解決しているとは言えない、現在も取り組んでいる最中のテーマであると言ってしまう。従って、今後の課題も限りなく多いのであるけれども、今日的意味も考慮して、次の三点を継続的テーマと考えたい。

第一は、何といたっても、このカルヴァンの「神の像」の理解をめぐる激しい論争が、カール・バルトとエーミル・ブルンナーの間でなされ、啓示と理性、神学と哲学、信仰と文化などの問題に発展した。⁽²⁷⁾ 自然神学の問題とも言つてよいが、この古くして新しい問題に、これからも取り組んでいきたい。キリスト教大学の神学的位置づけなどもこの応用問題となろう。

第二は「神の像」に創造されたことと、「男と女」に人間が創造されたことの間には、深い意味があるはずである。現代における男と女のあり方、人格存在として人間を考えることの真理性と有効性を含めて、学際的にこの問題を追求したい。それは、キリスト教人間論の再建が課題になっているからでもある。

第三は、新しい倫理の基礎として、回復された「神の像」がどのように機能するのか、人間論と倫理の問題を、現代の生命科学その他から提起されている問題とからめて、原理的面と実践的面の両面から追求していきたい。

- (1) カルヴァン「キリスト教綱要」(渡辺信夫訳) 1・15・4 『神の形』とは、人間の本性の完全な卓越性のことで、墮落前のアダムのうちに輝いていたものである。ところが、これは、そののちははだしく破壊され、ほとんど消し去られて、破滅以後は混乱し、切り刻まれ、汚れに染んだもののほか、何一つ残らなくなってしまった」(二二二ページ)
- カルヴァン「新約聖書註解」Ⅶ(ローマ書)ローマ人への手紙7・15「アダムが神の像を失い、それを取り去られて以来、人間の心のうちに残るのは、邪悪以外の何ものでもない」(一八六ページ)
- (2) Calvin, John; Commentary on Genesis, Gen. 9:6, p. 296. 「もし誰かが、この神の像はすでに抹消されてしまったのではないかと反論したとしても、解決は容易である。まず、神の像の幾分か〈残り〉が存在している。それ故に、人は少なからざる品位をもっているのである」
- (3) Barth, Karl, Die Kirchliche Dogmatik, III/1 Die Lehre von der Schöpfung, s. 225, e. t. p. 200. 「墮罪による『神の像』の喪失という宗教改革者の主張は、『神の像』を正しい心、あるいは完全な状態として人間が最初もっていたがその罪とさばきの結果直ちに失ったのだとする背景を考えれば理解できるし、またその必然性もある。しかしこの『神の像』の概念は創世記一章に根拠をもっていない。聖書の物語は創世記一章にも二章にも、その他どこにも原初の理想的人間については何も知らない。ここから、旧約聖書の他の部分にも新約聖書にも、この理想的状態の廃棄や、『神の像』の部分的ないし完全な崩壊のいかなる痕跡もないということは何ら驚くにあたらないことである。人間が所有していないものを、人は伝え残すことも失うこともできない。そして他方、人間の創造における神の意図とそれにかかわる約束は、失われたり、部分的にせよ全体的にせよ、消滅することはないのである。このことは、神の人間との交わりの歴史が、この関係に対する人間の反逆の現実としての墮罪によって廃棄されないという事実によって証明される。反対に、むしろそれは墮罪と共に始まることによってよい。というのは、この神と人との関係が人間にとって神の意図と全く反対になって、恥とさばきをもたらすとしても、この点において神はその意図を明らかにされ、人間に「なんじ」と呼びかけることによって、人を「私」として責任ある存在とし、人間同志を「私とあなた」として、また男と女として、互いに共に立ち共に倒れるものとされるのである。」
- (4) Calvin, John, Commentary on Genesis, pp. 295-296.
- (5) カルヴァン「キリスト教綱要」1・5・6 (七一ページ)

- (6) カルヴァンの詩篇一〇四篇二九節の註解 Torrance, T. F., Calvin's Doctrine of Man. 六二二ページより引用。
- (7) 同書 六二一―六三ページより引用。
- (8) カルヴァン「キリスト教綱要」Ⅲ・2・6 (二八ページ)
- (9) 同書 Ⅲ・2・7 (二九―三一ページ)
- (10) 同書 I・10・2 (一一四ページ)
- (11) Torrance, T. F., Calvin's Doctrine of Man, p. 98.
- (12) カルヴァン「キリスト教綱要」Ⅲ・3・9 (八九ページ)
- (13) 同書 (八九ページ)
- (14) 同書 I・15・4 (二二二ページ)
- (15) Torrance, T. F., Calvin's Doctrine of Man, p. 66.
- (16) 同書 六六ページより引用。
- (17) 次項四八ページ参照
- (18) カルヴァン「キリスト教綱要」Ⅲ・6・3 (一九〇ページ)
- (19) 同書 (一九〇ページ)
- (20) 同書 (一九〇ページ)
- (21) 同書 I・15・4 (二一九―二二〇ページ)
- (22) 前項四六ページ参照
- (23) 同書 Ⅲ・3・9 (八九―九〇ページ)
- (24) Torrance, T. F., Calvin's Doctrine of Man, p. 67.
- (25) カルヴァン「キリスト教綱要」Ⅲ・3・9 (八九ページ)
- (26) 同書 (八九ページ) なお、「神は信仰者たちが、この目標(神の像の回復)にまで到達するように、『悔改め』という競走のコースを指定したもう。かれらは全生涯にわたってこれを走り抜くのである」(九〇ページ)
- (27) 菅井吉論文集「バルト神学研究」菅支那編中の「バルトとブルナー『神の像』論争のゆくえ」(四九五―五〇七ページ)参照

参考文献

- Joannis Calvinii Opera Selecta, Ediderunt Petrus Barth, Guilemus Niesel, Volmen III-V, Institutionis Christianae Religionis 1559, librum I-IV continens, 1967-1974, Monachii in Aedibus Chr. Kaiser.
- Calvin, John, Institutes of the Christian Religion vol. I-II, edit. by McNill, John T., trans. by Battles, F. L. (The Library of Christian Classics vol. XX), The Westminster Press, Philadelphia, U. S. A., 1960.
- Barth, Karl, Die Kirchliche Dogmatik, III/1-2, Evangelischer Verlag AG. Zürich 1948.
- Brunner, Emil, Der Mensch im Widerspruch, Die Christliche Lehre vom Wahren und vom Wirklichen Menschen, Furche-Verlag, Berlin, 1937.
- Calvin, John, O. T. Commentary on Genesis, e. t. by John King, The Banner of Truth Trust, Pennsylvania, 1847.
- Dowey, Edward A. Jr. The Knowledge of God in Calvin's Theology, New York, Columbia University Press, 1952.
- Torrance, Thomas F., Calvin's Doctrine of Man, London, Lutterworth Press, 1952.
- カルヴァン「キリスト教綱要」(渡辺訳) I~IV 新教出版社
- 菅支那(編)「菅田吉論文集」ルト神学研究」新教出版社 一九七九